韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ㊼

友人知人平戸にも

松浦に滞在しても、松浦でじっとしている時間は少ない。定宿は鶴屋旅館である。気楽に泊まれる。女将とも気が合うが、遠い親戚にもなるらしい。もっとも、松浦で昔を辿ると、だれもかれも遠い親戚になるのかもしれない。松浦のわたしの親戚に嫁いだ人が、中学時代の恩師の娘さんだったりする。親戚の祝いの席で恩師と同席すると妙な気分である。

鶴屋旅館の夕飯はチームの連中にも評判がいい。なんせ、松浦のアジとサバの刺し身である。それに天ぷらとウナギ。女将さんはわたしの好みも知っていて、朝飯にはスボかまぼこや飛び魚の干物を付けてくれる。

朝食を食べると、すぐに同級生の吉本務さんに連絡をする。わたしは車の免許は持っていない。なんの免許もない。人生の免許もあるのかないのか疑わしい。吉本さんは車を運転して、晴れていれば、まず星鹿半島城山のてっぺんへ連れて行ってくれる。「平戸にするや、伊万里にするや」である。

平戸にも友人知人は多くいる。東船具店の東義治さんもその一人である。なぜかわたしとは気が合う。やはり人間の寂しさを知っている人である。東船具店はわたし好みの古民家風である。2階で奥さまの入れた紅茶をいただいた。品のいい奥さまらしく、品のいい紅茶の味であった。津川雅彦さんもこの家の紅茶は召し上がったはずである。東さんのご一家は、松浦でのわたしの演劇の公演も見に来てくれる。一家総出である。東船具店で買い求めた船の舵とプイはいまも我が家に飾ってある。

もう、30余年も前の夏の盛りの話である。わたしと次男坊の源紀で、平戸の海上ホテルに1週間ばかり滞在したことがある。なにかの取材を兼ねての滞在だった。源紀とは、源から出直せの意味で命名した。

源紀の手を引いて蝉時雨の海岸べりを散歩していると、軽トラが止まり、運転をしていた女の人が「岡部さんじゃなかですか」と声を掛けてくれた。伊万里高校の同級生だった人であった。平戸の山本海産物店に嫁いでいるという。その夜はご主人の山本岩利さんと同級生だった八重子さん、東義治さんとの初めての飲み会であった。

八重子さんは伊万里市の生まれである。まだ橋も架かっていない時代に平戸市まで嫁いで来ていたのである。ドラマである。岩利さんにそれほどの魅力があったのはわかる。情があり、面倒見のいい人である。

「肥前はいっちょ」という言葉がある。長崎県から佐賀県をまたいで肥前の国は広い。だが「いざとなれば肥前の人の心はひとつになる」という意味である。元寇の文永、弘安の役がそうであった。

（松浦市出身）